

第 63 回日本人間ドック学会学術集会

健診・診療データと MCI スクリーニング検査を用いた生活習慣病と認知症リスクの解析

伊藤 ひとみ<sup>1</sup>, 岡本 亜希子<sup>1</sup>, 今戸 章人<sup>2</sup>, 佐々田 慧<sup>2</sup>, 浅見 磨孝<sup>2</sup>, 内田和彦<sup>1</sup>

<sup>1</sup>株式会社 MCBI 研究開発部, <sup>2</sup>株式会社 太陽生命少子高齢社会研究所

【背景】生活習慣病は認知症のリスクであることが最近の研究から明らかとなっている。脳を健康に保ち、認知症発症前に天寿を全うする事は拡大を続ける医療費の削減、また介護に携わる家族や周囲の人々の苦勞を軽減することにもつながり、急速な高齢化の進む日本にとって重要なことである。今回、我々は認知症予防のための生活習慣の改善と血液検査による予防効果の可視化を目的に企業健診のデータを解析した。【方法】健診および診療データを匿名加工化しデータベース化した。これらのデータを用いて生活習慣病（糖尿病、高血圧症、脂質異常症）と軽度認知障害（MCI）の血液バイオマーカーの ApoA1, トランスサイレチン, 補体タンパク質 C3 との関連について解析した。これら 3 つのタンパク質から MCI リスク値を算出し、低リスクから A, B, C, D の順にグループ化した【結果】70 代、80 代の高齢従業員では、無職の方が多い一般受検者と比較して MCI リスクが低く、AB 判定が一般受検者 76.4%、従業員 88.8%であり、D 判定は一般受検者の 8.9%と比べて 1.3%と少なかった。加齢に伴い低下する C3 が一般受検者と比べて従業員では有意に高い ( $p < 0.05$ ) ことが原因と考えられた。生活習慣病罹患者は非罹患者と比較して C, D 判定の割合が多く、糖尿病の罹患履歴をもつ者は ApoA1 が低かった。また生活習慣病罹患者は非罹患者と比較し BMI 値が高く、特に脂質異常の罹患者は BMI 値が有意に高かった ( $p < 0.05$ ) 【結論】C3 は自然免疫の重要な液性因子であることから、就業することにより規則正しい生活を送り、人とかかわる事で免疫機能を高める可能性が示唆された。認知症のリスクである生活習慣病、肥満と MCI の血液バイオマーカーの関係が見出されたことは、認知症予防における効果の可視化の点で興味深い。